ロヒンギャ危機
ー「民族浄化」の真相

210781109　水野友乃

本書の目的

- 複雑な歴史的背景やミャンマーをめぐる国内・国際政治を通し、アジア最大の人道・人権問題の全貌を示すこと

目次

1章　ロヒンギャとは

2章　国民の他者

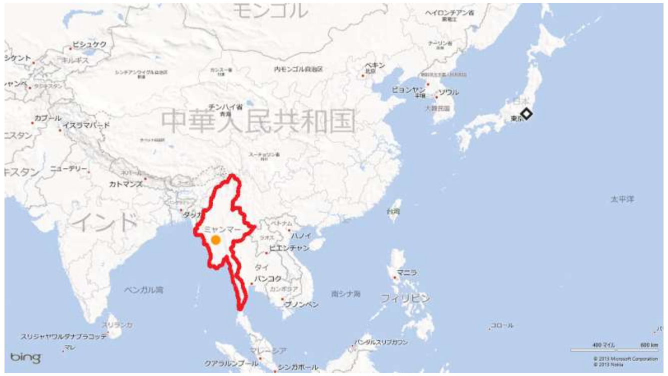
3章　国家による排除

4章　民主化の罠

5章　日本の役割・まとめ

ミャンマーについて

- 東南アジアの西に位置する。
- 人口は約5400万人。
- 国土は魚のエイのような形状で、北部はヒマラヤ山脈の東部にあたり、東南アジア最高峰のカカボラジ山が最北端にそびえる。



1章　ロヒンギャとは？

- ミャンマーのラカイン州北部に住むムスリム（イスラム教徒）のこと。
- ミャンマーでは仏教徒が全人口の9割弱であるため、少数派民族である。

ロヒンギャとは誰か、定義は？

- ロヒンギャとは誰で、人口がどれくらいなのか。という質問に回答することはとても難しい。アイデンティティの輪郭がはっきりしていない。また、統計があてにならず、正確な人数が分からない。
- ロヒンギャを広く定義すると、ラカイン州出身のムスリム、ロヒンギャの自覚がある人のこと。また、自覚がなくても、他の民族的アイデンティティを特に持っていない人々のこと。

ロヒンギャ危機とは？

- 大量の難民の発生が引き起こした人道上の危機。
- 2017年ラカイン州北部の広い範囲で戦闘が続き、約70万人の難民がラカイン州と接する隣国バングラデシュに流出した。
- ロヒンギャ問題が国際的に注目を浴びたのは難民あるいは人権問題としてであった。

ロヒンギャの多くは無国籍者

- ミャンマー政府
  →バングラデシュから不法に入国してきた人々
- バングラデシュ政府
  →ミャンマー国民であるとみなしている

無国籍者が生まれる過程

- 国民という帰属意識が形成される中で、特定の人々が、国民ではない者、言い換えれば「国民の他者」として位置づけられていく過程。
- 国家という統治機構がその権力を使って、特定の集団の権利を制限したり、それらを奪ったりする過程。「国家による排除」

2章　国民の他者①

①大英帝国の辺境で形成された国家

イギリスの侵攻により、コンバウン朝による
ラカインの支配は50年ほどで終わる。

国民の他者②

②ナショナリズムの排他性

ミャンマー・ナショナリズム萌芽は、1906年に結成された青年仏教協会である。

仏教とその文化の振興を目的としていたが、次第に反植民地運動色を強めていった。

国民の他者③

③日本軍政下での紛争勃発

太平洋戦争開戦直後の1942年1月、日本陸軍の第15軍団がマレー半島北部を横断し、ミャンマーに侵攻。3月にはヤンゴンを制圧し、さらに北部へ進軍。

日本軍のラカインへの侵攻は、シットウェ飛行場の占領を第一の目的とした。

国民の他者④

④独立とロヒンギャの「誕生」

ミャンマー独立：アウンサンは、当時30歳に満たない若者であったが、日本軍政下で一躍し民族解放の英雄になった。当時は自らを重用した日本軍に協力的だったが、名ばかりの独立や、日本軍による度重なる政治介入に対して、次第に不満を募らせていく。

国民の他者④

④独立とロヒンギャの「誕生」

日本の敗戦によってアウンサンは、植民地政府を放逐し、さらに日本軍も打倒するという2つの功績をわずか5年の間に手にしたのである。

3章　国家による排除①

①二つの軍事政権

国軍中心の国家が建設

→中央集権化の進展

→閉鎖的な外交政策

→ネーウィンが独裁的な権力をもち、ナショナリズムと社会主義をイデオロギー的な基礎としつつ、国軍の影響力が突出した中央集権的で閉鎖的な軍事政権が生まれた。

国家による排除②

②タインインダー（土着民族）と国籍法改正

ネーウィンとタンシュエという二人の指導者が支配した長い軍事政権でロヒンギャを取り巻く環境

→国家による排除と管理の強化

ネーウィンは自身の理想である土着民族中心の国民像を現実にするために国籍法を改正。

国家による排除③

③難民流出による国際問題化

ナガーミン作戦（1978）

→不法入国者の取り締まり。

一部の地域ではロヒンギャとラカイン人との衝突に発展。帰還プログラムが実施されたが望まない人も多くコミュニティが世界各国で誕生、拡大した。

国家による排除④

④国家安全保障とロヒンギャ

ロヒンギャは人権侵害の被害者であるため、民族主義的な主張ではなく、ミャンマー政府による人権侵害とロヒンギャの権利保護の必要性を国際世論に訴えるようになった。

→ロヒンギャに対する安全保障化が進められてしまっていた。共存というよりも排除の対象に。

国家による排除⑤

⑤ラカイン人とロヒンギャ

ラカイン州の設置が独立後の重要な目標であったラカイン人。このラカイン民主主義にとって、連邦政府に並ぶ敵がロヒンギャであった。

4章　民主化の罠

軍事政権下の統制

→民主化の進展：テインセインが新大統領に就任、独裁者タンシュエが引退。

→自由が拡大：制度、人、国際環境

→民主化が暴力に繋がる

5章　日本の役割・まとめ

- 難民の帰還・国籍付与・国際機関主導の復興
- 責任追及と処罰による和解の推進
- 再発防止のための制度改革

日本の役割

①人道支援と帰還プロセスの支援

②国内司法による事実解明と責任者訴追への働きかけ

③ラカイン州開発のための開発支援

④新しい連邦制の構築支援

⑤国軍・警察の能力開発

まとめ

- 日本はミャンマーで大きな存在感があり、アジア全体でもさまざまなかたちで影響力を保持している
- ラカイン州北部の人道・人権問題にもっと積極的に関わり、政府や市民社会による効果的な支援策を模索するために、より活発な議論があっても良いと考える。